

# 近世中期の日本漢詩の訓読における 助詞「ハ」付与について\*

浅山佳郎

[キーワード] 主題 「は」 訓読 漢文

## 1. はじめに

### 1.1. 問題点

日本漢文は、直接用いられている古典中国語<sup>1)</sup>と「補助的」に加えられる訓読日本語という、言語上2つの性格を持つ。日本人の用いる古典中国語に訓読がついてまわるというこの中国語と日本語の並存問題は、以下の3つの差を生む。

- a 訓読日本語としては適格だが、古典中国語として不適格な場合
- b 古典中国語としての構造分析＝意味が訓読日本語と異なる場合
- c 古典中国語に無い情報が訓読日本語で加えられている場合

a は、いわゆる「和臭」問題と呼ばれるものであり、b は訓読の弊害とされる問題である。それぞれも重要な問題ではあるが、ここでは3つめを取り上げる。

中国語に無い情報で、訓読によって加えられる要素は以下の2つが中心となる。

- i 名詞句後置要素（助詞）
- ii 述語後置要素（助動詞など）

このうち、ii については、言語の判断要素（モダリティ）が“epistemic”

(認識判断)なものとは“deontic”(義務判断)なものに分かれるとする場合、中国語のそれが後者を中心とするのに対し、日本語のそれが前者を中心とすることによる差が大きい。これも興味深い問題ではあるが、本稿では、この問題は扱わず、iの名詞句後置要素のなかでも、助詞「ハ」の問題をとりあげることとする。

なお、中国語と日本語の並存にともなう問題として、組み合わせの4番めに「訓読日本語に無い情報が古典中国語としてはある場合」がありうる。具体的には読まない虚字などであるが、これは視覚情報としては把握されているので、当面の問題にはしない。

## 1.2. 訓読の資料

資料としては、まず中心的に、伊藤仁斎(1627-1705)の漢詩を用いる。なお、詩句本文および訓読は、以下の版本に記されているものに従う。

『古学先生詩集』<天理図書館所蔵 歴代手沢本>享保2年版  
(ぺりかん社『近世儒家文集集成1』)

仁斎の漢詩を用いるのは、以下の理由による。まず、仁斎の作品は稿本からのトレースが可能で、同時代的な訓読をかなり正確に決定しうることである。上記の版本のほかに、稿本である伊藤東涯編・林景苑筆の『古学先生詩集』<天理図書館所蔵 林本>にも訓点を加えてあり、本稿でも参考とする。これに加えて、古文辞学派以前なので、訓読による作成および受容が比較的重要視されている時期の作品であること、漢詩が、各句の独立性が高く、ディスコース上の要素を比較的に低く押さえられること、も理由である。

以下の本論中における統計的な処理は、この伊藤仁斎の詩集である『古学先生詩集』巻1の142首、1184句に対して行う。さらに、用例としては、このほかに以下に示すものから取り上げる<sup>2)</sup>。

伊藤東涯『紹述先生文集』宝暦11年版(ぺりかん社『近世儒家文集集成4』)

祇園南海『南海先生文集』天明4年版(汲古書院『詩集日本漢詩1』)

新井白石『白石先生余稿』享保20年?(汲古書院『詩集日本漢詩1』)

服部南郭『南郭先生文集初編』享保12年版(汲古書院『詩集日本漢詩

## 3])

これらも、新井白石のものを除くと、版本での訓点付与が比較的明らかなものであり、同時代的な訓読を決定しやすい。また、これらの作品は、ほぼ伊藤仁斎と同時代と認めうる。よって、本稿は、近世中期（17世紀後半から18世紀後半まで）の日本漢詩に見える訓読日本語の研究ということになる。

## 1.3. 結論

結論としては、以下のことを示す。

- (1) 助詞「ハ」は、格関係を示すことのできない名詞句を持つ句、またはリズム構造のくぎりが変則的な句に対する「統語」支配の代替として、「主題」支配を示すために付与される。

これは、以下のような事情であると考えられる。つまり、古典中国語では、位置という格形式が比較的「ゆるい」格を許すのに対し、日本語では、格助詞による格パターンが比較的固定的なので、格助詞を与えられない名詞句は統語的なコントロールを持たない。訓読されたある日本語文がそのような不安定さを持つ場合に、それでも、その不安定な名詞句を含めて1句が形成されていることを示すために、「主題」コントロールという統語的手段とは異なる別の手段が用いられる。

なお、詩ではない文章の場合は、

- a 「者」字のあるところ
- b 名詞述語文または形容詞述語文の主語
- c 「主述構造述語文」の最初の名詞

に助詞「ハ」が付与される。このうちaはほぼ必須であるが、bとcは、必要条件ではない。いずれにしろ、この必要条件は、そのまま古典中国語の伝統的な「主題」の定義と重なる要件である。ただし、これが必要条件であって、「ハ」で実現されないところがあることについては、ディスコース上の語用論的条件が働くと考えることができる。

なお、詩句を資料とする本稿では、詩という特性から、この語用論的な条

件を加えることがきわめて困難であり、結果的にそれを除いて分析することができる。それによって、「ハ」の統語的な問題に焦点を当てて整理することが可能になると考える。

## 2. 古典中国語の主題と日本語の助詞「は」

### 2.1. 格

古典中国語では、介詞構造を除くと、述語の前後の「位置」が「格」を示す形式となる。述語の「前位置」と「後位置」を形式としての格と認め<sup>3)</sup>、それぞれ「N<sub>1</sub>・N<sub>2</sub>」とし、いわゆる「主述述句」をとる名詞句を「N<sub>0</sub>」とすると、古典中国語の格形式パターンは、以下のようになる。

- (2) a            N<sub>1</sub> 述語 N<sub>2</sub> (N<sub>3</sub>)  
       b    N<sub>0</sub> N<sub>1</sub> 述語 N<sub>2</sub>

この2つが、基本的な「位置」格である。このうち a で示した「N<sub>3</sub>」を持つ二重対格句は少ない。伊藤仁斎の詩集巻1では、全部で1184句のうち、以下のような例の6句のみであり、比率では約0.5%程度に過ぎない。

- (3) a 買田京洛東南地=田を買ふ京洛東南の地（『古学』1）  
       b 寄語洛陽小兒女=語を寄す洛陽の小兒女（『古学』1）

よってほぼ(2)に示す「N<sub>0</sub>, N<sub>1</sub>, N<sub>2</sub>」の3つの位置を考えればよいことになる。それぞれの「位置」形式に与えられる訓読日本語の助詞形式は以下のとおりである。なお「助詞」の欄の「 $\phi$ 」はどのような助詞も与えられていないことを意味する。

表1 仁斎の漢詩における各「位置」名詞句に与えられた訓読名詞句の助詞

名詞句 \ 助詞	ガ	ヲ	ニ	斜格 <sup>4)</sup>	ハ	φ
N <sub>0</sub>	0	0	0	0	0	107
N <sub>1</sub>	0	1	6	0	70	568
N <sub>2</sub>	0	324	123	20	0	238

この表からは、各「位置」形式に与えられる助詞形式について、以下のことを指摘できる。まず「N<sub>0</sub>」は「φ」が無標であり、また「N<sub>1</sub>」も「φ」が無標である。つまり「前位置」は基本的に助詞でマークされない。これに対して、「N<sub>2</sub>」は「ヲ」または「ニ」でマークされるのが無標である。「N<sub>2</sub>」が「φ」になるのは、返らない読みの場合である。なお、「ハ」は、すべて「N<sub>1</sub>」に与えられている。これはいわゆる「主述述語句」の最初の名詞句に「ハ」が与えられていないことを意味する。また、「N<sub>0</sub>」がある時の「N<sub>1</sub>」は全て「φ」で、「ハ」は加えられない。

## 2.2. 対比と主題

訓読に与えられた「ハ」は、対句に多く用いられているように、対比の効果を持つことも確かであるが、対比は訓読日本語における「ハ」使用を、それだけで決定するものではない。それは、以下の(4)の例のように、対句以外の句にも「ハ」が用いられていること、および(5)の例のように、対句でも対比の「ハ」が用いられていない例がかなりあることなどから明らかである。

- (4) a 月白一川風＝月は白し一川の風 (『古学』1)  
 b 雪照金釵十二行＝雪は照らす金釵十二行 (『南海』3)  
 c 兼味幸非縁市近＝兼味は幸に市の近きに縁るに非ず (『古学』1)
- (5) a 船遠閑閑去＝船 遠うして 閑閑として去り  
 天長漠漠空＝天 長うして 漠漠として空し (『古学』1)  
 b 風雨忽揺蒼樹色＝風雨 忽ち揺がす蒼樹の色  
 庭闌永謝白雲辺＝庭闌 永く謝す白雲の辺 (『南郭』4)  
 c 夜深独向楼頭月＝夜 深うして 独り向ふ楼頭の月  
 日暮閑看檻外雲＝日 暮れて 閑かに見る檻外の雲 (『古学』1)

対比以上に、「ハ」の機能としては、主題という性格が強いと見ることができる。そうみなすことが可能な根拠としては、「ハ」が加えられる名詞句の位置を挙げるができる。日本漢詩訓読での「ハ」は、圧倒的に句頭が多い。これは和文や和歌において係助詞として用いられる「ハ」と異なる点である。

表2 仁斎の漢詩における「ハ」が与えられる語句の位置

位置	句頭1字 名詞	句頭2字 名詞	連体句付句頭 名詞(3字目)	準体句(1字ま たは2字目)	接続句 「テハ」	その他	合計
句数	44	13	11	6	4	2	80

1字名詞と2字名詞を合わせると、句頭名詞句に与えられた「ハ」が、71.3%と4分の3近くを占める。これに「千峰の雨ハ」のような修飾語付きの名詞と、「志を持するハ」などのような述語の前の位置に置かれる準体句を合わせると、90%以上が句頭である。接続句の「テハ」を除く例外は以下に示す2つのみである。aは対比の後名詞に与えたもの、bは副詞を前置させたものである。

- (6) a 牆下種麻牆外棘＝牆下 麻を種ふ 牆外は棘（『古学』1）  
 b 夜夜月從梢上過＝夜夜 月は梢上より過ぎ（『古学』1）

句頭位置は、それ以下の語句と切り離されうる位置である。「ハ」がここに置かれるのは、それ以下の語句全体に対応する位置に置く必要があるためと解することができる。その場合、句頭名詞句はそれ以下の語句を評言とする主題になる。

全部で80例ある「ハ」のうち、対句が64例、つまり32組の対句に「ハ」が与えられている。伊藤仁斎の詩集巻1の対句は全部で290組であり、その全てに名詞が1つは含まれているので、「ハ」を加える可能性が全てにあると仮定すると、「ハ」使用率は11.0%となる。これに対して、全ての句頭名詞句に対する使用率は16.2%である。ここから見て、「ハ」の機能は、対比よりは主題としての性格をより強く持つと考えることができる。

ただし、「ハ」使用が対句と無関係というわけではない。「句頭名詞句」と

いうほかに、「対句」という条件が重なれば<sup>5)</sup>、「ハ」は発動されやすくなる。だから逆に、対句の比較的少ない絶句を納める巻2には、「ハ」の用例が少ない。

いずれにしる、対比的な意味を十分に残しつつ、句頭の「N 1」名詞にししか加えられないという点から判断して、「ハ」は主題マーカーとしての機能を強く果たしていると考えることができる。

### 2.3. 中国語の主題

「ハ」を主題マーカーとみなした場合、つぎに問題となるのは、それが古典中国語としての主題と訓読日本語としての主題のいずれを示しているのかということである。ここでは、助詞「ハ」が古典中国語の主題とは一致していないこと、いいかえれば、それが訓読日本語独自の情報をになっていることを検討する。

古典中国語の主題は、伝統的には、以下のように定義される。

- (7) 这类主语既不是谓语的施事也不是受事，也不是谓语表示存在的对象，而是谓语描绘，陈述，评论的对象，是主题主语。(略) 它的谓语包括动词和其它一切类型的谓语。下面我们就看看它的谓语：1，以形容词或其短语为谓语的的主题主语句。2，以名词或其短语为谓语的的主题主语句。3，以动词或其短语为谓语的的主题主语句。4，以主谓结构为谓语的的主题主语句。(楊，何 1992, p. 766)

この定義にしたがう場合、中国語の主題は、いわゆる主述述語句または名詞述語句の句頭名詞を典型とするが、日本漢詩の訓読日本語においては、これらの名詞にはほとんど「ハ」が与えられていない。

表3 仁斎の漢詩における句の構造ごとの有題句比率

	単句	複句	主述構造述語句	名詞述語句
有題句	60 (16.1%)	14 (8.2%)	0 (0.0%)	2 (2.4%)
無題句	312 (83.9%)	156 (91.8%)	107 (100.0%)	80 (97.6%)

主題「ハ」を持つ有題句は、述語が1つである「単句」が中心であり、それに2つ以上の述語を持つ「複句」の例がややあるだけで、主述述語句や名詞述語句では、(8)や(9)の例のようにほとんどない。伊藤仁斎の詩集巻1では、例外は(10)の名詞述語句の2つだけである。

- (8) a 西山雨已収=西山 雨 已に収まる (『古学』1)  
 b 幽径花開時自香=幽径 花 開きて 時に自ら香し (『古学』1)  
 c 銀渚露初結=銀渚 露 初めて結ぶ (『南海』2)  
 d 菱花影碧瀉清光=菱花 影 碧にして 清光を瀉す (『紹述』24)
- (9) a 仙妝本是西河種=仙妝 本是れ西河の種 (『古学』1)  
 b 季弟猶総角=季弟 猶ほ総角 (『古学』1)  
 c 東都非我土=東都 我が土に非ず (『南海』2)  
 d 故園秋色是他郷=故園の秋色 是れ他郷 (『白石』1)
- (10) a 遠師大乘士=遠師は 大乘の士 (『古学』1)  
 b 朝廷有慶是人才=朝廷 慶有るは 是れ人才 (『古学』1)

(8)の例のように、主語述語構造句を述語として持つ「No」名詞句は、古典中国語としての「主題」であることが位置の上から明確であるので、訓読日本語としても主題をあらためて表示する必要がないものである。古典中国語としての位置情報を視覚的に提示できない音読の場合は、この位置に、おそらく主題を示しうるもう1つのマーカーである「停頓」が置かれるはずである。また、(9)の例のように、名詞述語句は、動詞述語のように複数の名詞句を項として持たないので、他の格との混乱がなく、日本語としてやはりあらためて主題であることを表示する必要がないものである。

こうした意味で、「ハ」は、古典中国語の典型的な主題に対応するものではないといえることができる。

こうした伝統的な主題理解は、基本的に主題を句の統語レベルに置いて考えるものであるが、それとはべつに、主題を談話レベルでとらえようとするものもある。曹逢甫の研究 (Tsao. 1979, 1987, 1990 など) では、主題を談話上の“topic-chain”から規定している。

(11) In two of my previous works (Tsao 1978, 1979) (略) it is



concluded that subject in Chinese has the following properties: (a.) Subject is always unmarked by preposition. (b.) By position, subject can be identified as the animate NP to the left of the verb; otherwise, the NP immediately before the verb. (c.) Subject always bears some selectional relation to the main verb of the sentence. (略) Tsao (1978,1979) also demonstrates that topic in Chinese can be identified as an NP having the following properties: (a.) Topic invariably occupies the S-initial position of the first sentence in a topic chain. (b.) Topic can optionally be separated from the rest of the sentence in which it overtly occurs by one of the four pause particles: a, na, me, and ba. (略)  
Tsao (1987)

詩では、各句の独立性が強く、また一般的な結びつきではない“chain”が形成されている可能性が高いので、“topic-chain”による主題を決定しにくい。しかし、たとえば“topic-chain”からの要請が強いため「後位置」から「前位置」に移動されたと考えることのできる目的語前置の例についても、以下のように「ハ」ではマークされない。

- (11) a 魚鰕不可蔵＝魚鰕 蔵す可からず (『古学』1)
- b 旧伴新朋同謝遣＝旧伴新朋 同じく謝し遣り (『古学』1)
- c 此情難尽書＝此の情 尽く書き難し (『南海』2)
- d 此心擬借素書伝＝此の心 素書を借りて伝へんと擬す (『南郭』4)

こうした点から見て、古典中国語としての主題に対しては、訓読日本語では「ハ」は与えられておらず、基本的に無マーカでしめされていると考えることができる。つまり、古典中国語としての主題は、訓読日本語においても、助詞が付与されない句頭名詞句という無標の名詞句で示される。これが主題と主格の重なった名詞句か、あるいは位置格としての主格だけなのかは、“topic-chain”によって決定される。詩の場合、対句などを除くほとんど全ての句頭名詞句が、“topic-chain”による主題と重なると考えてもかまわない。

これに対して、「ハ」が付与されるのは、有標の主題ということになる。そしてこのマークされた主題は、訓読日本語のみに存在し、古典中国語にはな

い情報ということになる。

### 3. 「ハ」の機能

#### 3.1. 後置名詞句の分布と一述語句における「ハ」の機能

では、この訓読日本語のみの主題マーカー「ハ」は、どのような規則で付与されるのか。その付与には、統語論的側面に関わる機能とそれ以外の語用論的な側面に関わる機能がある。語用論的なものとは、音律・字数・対句に関わるものであるが、本稿では、この問題はひとまず置いておく。いっぽう、統語論的側面に関わる機能とは、句全体が1つにコントロールされることを示すというものである。以下、この問題を論ずる。

まず、次の表は、伊藤仁斎の詩集巻1の各詩句において、述語に後置される名詞句の有無と句頭名詞句に与えられる主題マーカーの「ハ」との関係を示すものである。なお、この表で、句頭名詞句の「N<sub>1</sub>ハ」は、句頭名詞句に助詞「ハ」が与えられているもの、「N<sub>1</sub>φ」は、句頭名詞句に何の助詞も与えられていないもの、「無」は、句頭名詞句がないものである<sup>6)</sup>。

表4 仁斎の漢詩における述語後置名詞句の有無と句頭名詞句の「ハ」との関係

後置名詞句 句頭名詞句	N <sub>2</sub> 有り	N <sub>2</sub> 無し	合計
N <sub>1</sub> ハ	53 (88.3%)	7 (11.7%)	60
N <sub>1</sub> φ	230 (59.0%)	160 (41.0%)	390
無	262 (94.9%)	14 (5.1%)	276
合計	545	181	726

この表では、「N<sub>1</sub>」に「ハ」が付与される場合、約9割が、述語に後置される名詞句「N<sub>2</sub>」を持つものに対し、「N<sub>1</sub>」が無助詞の場合は、6割程度ではないことが示されている。つまり、句頭名詞句に「ハ」が付与されるかどうかは、述語に後置される名詞句の有無と関係が強いことを意味する。

次に、この述語に後置されている名詞句の「格」関係と、主題マーカー「ハ」との関係を見る。以下の表5である。なお、この表で、述語に後置される名

詞句の種類のうち、「N<sub>2</sub>ヲ・ニ・斜」とするのは、その名詞句に「ヲ」や「ニ」などの格助詞があたえられたもので、「斜」格は、「ト、ヨリ」のほか、名詞に後接する「ごとし」に接続する「ガ・ノ」を加える。「N<sub>2</sub>φ（主・対格）」とするのは、後置名詞句に、実際には格助詞が出現していないが、意味の上から「ガ、ヲ、ニ」の3種類の格助詞のいずれかを補うことが可能なものである。このうち「ニ」は、必須項を示す「ニ」のみとする。また「ガ」は、「有無」など存現動詞の主体となるものである。「N<sub>2</sub>φ（他・無格）」とするのは、後置名詞句に格助詞が出現しておらず、かつ「ガ、ヲ」および必須項を示す「ニ」の3つの格助詞のいずれをも補えないものである。無理に格助詞を出現させようとするれば、「デ」や「ニ」などが可能になる場合もあるが、すべて訓読文としては不安定または不適當なものであり、それ以外の多くの場合は、いかなる助詞も補えない。

表5 仁斎の漢詩における述語後置名詞句の格と句頭名詞句の「ハ」との関係

後置名詞句 の格 句頭名詞句	N <sub>2</sub> ヲ・ニ・斜	N <sub>2</sub> φ（主・対格）	N <sub>2</sub> φ（他・無格）	合計
N <sub>1</sub> ハ	22 (41.5%)	7 (13.2%)	24 (45.3%)	53
N <sub>1</sub> φ	147 (63.9%)	73 (31.7%)	10 (4.3%)	230
無	150 (57.3%)	92 (35.1%)	20 (7.6%)	262
合計	319	172	54	

この表は、句頭名詞句に「ハ」が付与されている場合、「N<sub>2</sub>」の半数近くが、「ガ、ヲ」または必須項を示す「ニ」といった格助詞でマークされていないばかりでなく、潜在的にもそれらの助詞を補うことができないことを示している。いっぽう、句頭名詞句に何も助詞が加えられていない場合、あるいは句頭名詞句がない場合の後置名詞句について見ると、そのような形式上の格を与えにくい名詞句は、1割に満たない。

上の表で「N<sub>2</sub>φ（主・対格）」に分類される詩句が「172」もあるように、助詞のない「N<sub>2</sub>φ」も、基本的には、「ヲ」または「ニ」を与えることができる。たとえば、「空開桑戸口」は、版本に与えられた訓点に従えば、「空しく開く 桑戸の口」と訓読するが、これを「空しく桑戸の口ヲ開く」と訓読

することも可能である。

ところが、そうした「ヲ」や「ニ」を与えられない名詞句が述語に後置されている場合もある。たとえば、次の例である。

(12) 終日経過雨霽時＝終日経過す 雨霽るる時（『古学』1）

この場合、「経過」に後置されている名詞句は「雨霽時」である。「終日が過ぎていき、雨がやっと晴れる時になった」という意味であると考えられるが、「雨霽時」は、動詞「経過」に対して、「ニ」などの格助詞で関係付けることができない。

こうした後置名詞句は、意味的には「主体」「時」「所」「その他」に分けられる。そして、こうした名詞句があり、かつ句頭にも名詞句がある場合には、(12)の例のように、何も助詞が与えられない例もあるが、その多くで、句頭の「N」に「ハ」が与えられる。

まず、比較的はっきりしている「その他」の例である。

- (13) a 月白一川風＝月は白し 一川の風（『古学』1）  
 b 風軽曾点服＝風は軽し 曾点が服（『古学』1）  
 c 月微東嶺雲＝月は微なり 東嶺の雲（『古学』1）  
 d 首翹重疊土峰雪＝首は翹く 重畳たる土峰の雪（『古学』1）  
 e 雪霽千峰兼万壑＝雪は霽る 千峰と万壑と（『古学』1）

これらの「一川の風」「曾点が服」「東嶺の雲」「重畳たる土峰の雪」「千峰と万壑と」といった後置名詞句は、その前の述語句の示す「月が白い」「風が軽い」「月が微かだ」「首をあげる」「雪が晴れる」といった事態に対して、状況や原因を述べるものである。これらの名詞句に「デ」や「ニ」といった助詞を無理に入れるのは、訓読日本語としては適当でない。その意味でこれらの名詞句は形式上の格を表面的にも潜在的にも持てない。

この種類の名詞句は、伊藤仁斎の詩集巻1に11例あるが、そのうちの10例は、句頭名詞句に「ハ」が与えられている。例外は次の1例のみである。

(14) 征馬休嘶土峰雪＝征馬嘶くこと休めよ土峰の雪（『古学』1）

つぎに、意味的に「主体」を示すのは、以下の例のような、「ノ」を介して動詞に前置されている名詞句と組みあわせて、事態の「主体」を示すものである。

- (15) a 枝短新楊柳＝枝は短し 新楊柳（『古学』1）  
 b 鬢泛三花又五英＝鬢には泛かぶ 三花また五英（『古学』1）  
 c 盤堆庖氏新裁鱠＝盤は堆し庖氏新たに裁ちたる鱠（『古学』1）  
 d 鬢班好易李之才＝鬢は班なり 易を好む李之才（『古学』1）

これらの「新楊柳」「三花また五英」「庖氏新たに裁ちたる鱠」「易を好む李之才」は、それぞれの句頭名詞句と、「新楊柳ノ枝」「鬢ノ（中ノ）三花また五英」「盤ノ（上ノ）庖氏新たに裁ちたる鱠」「易を好む李之才ノ鬢」といった意味関係を持ちうる。しかし、動詞に後置された名詞句に、事態の主体を示す「ガ」や「ノ」といった助詞を与えることは、訓読日本語としてできないので、これも形式上の格関係を持たない名詞句となる。

動詞に後置されるのがこうした「主体」を示す名詞で、かつ句頭名詞句がある例（ただし、「有無足乏多」など存在を示す存現動詞は除く）は、伊藤仁斎の詩集巻1に12あるが、そのうちの8例で「ハ」が付与されている。例外は以下の4つである。

- (16) a 風光易老 陽春＝風光 老い易し 維陽の春（『古学』1）  
 b 布衣自楽一書生＝布衣 自ら楽しむ 一書生（『古学』1）  
 c 霜皮剥落老龍姿＝霜皮 剥落たり 老龍の姿（『古学』1）  
 d 旭日乍収千嶂雨＝旭日 乍ち収まる 千嶂の雨（『古学』1）

残りの「時」と「所」を示す名詞句には、「ニ」を与えることが可能であるが、伊藤仁斎の詩集で実際に「所名詞」に「ニ格」が与えられているのは、「入る・上る」といった移動動詞の目的地か「坐す・生ず」といった動作結果を含意する動詞の存在場所であって、以下の例のようなその事態が関与する場所という漠然とした意味ではない。また「時名詞」にはほとんど助詞が与えられない。

- (17) a 名聞北路裔夷国＝名は聞ゆ 北路裔夷の国（『古学』1）

- b 墓古清閑山寺中＝墓は古る 清閑山寺の中（『古学』1）
- (18) a 月満露垂時＝月は満つ 露の垂るる時（『古学』1）
- b 雨湿新篁解籜時＝雨は湿す 新篁籜を解する時（『古学』1）

動詞に後置されるのが「時」名詞および「所」名詞で、かつ句頭名詞句がある例は、伊藤仁斎の詩集巻1に11あるが、そのうちの7例で「ハ」が付与される。例外は以下の4つである。

- (19) a 日暮江城路＝日 暮る 江城の路（『古学』1）
- b 清芬自溢三三径＝清芬 自ら溢る 三三径（『古学』1）
- c 幽賞先期九九天＝幽賞 先づ期す 九九の天（『古学』1）
- d 穎悟早成十五歳＝穎悟 早成 十五歳（『古学』1）

「ハ」の与えられた句頭名詞句は、主題として、それ以下に述べられる句に対応する。一般的に主題に対応する句は複数からなり、それが談話単位をつらなりとなって“topic-chain”構造を作る。しかし、詩においては、“topic-chain”としての談話単位は1詩句ごとに形成されやすい。そのため、句頭の「ハ」名詞句は、1詩句を、詩における実質的な1“topic”単位としてまとめるという機能を持つ。つまり、句末までをコントロールするという機能を持つのである。

通常、日本語における句のコントロールは、述語と格助詞との関係によって形成される。しかし、漢詩の訓読日本語においては、上に見たように、こうした格助詞による統語的な関係を表面的にも潜在的にも保持し得ない場合がある。そういう場合に、格パターンがとれない名詞句が述語の後に存在したとしても、その名詞句を含めて1つの単位の支配下にあることを示すために、「ハ」の談話単位コントロール機能が用いられるのである。

これが漢詩の訓読日本語における「ハ」の機能である。「ハ」は、句全体を談話単位としてコントロールすることによって、日本語としては格助詞を用いて統語的にコントロールできない句に、代理的に1単位としての支配関係を与えているのである。これは他の詩人の漢詩における「ハ」の用例でも基本的に同じである。

- (20) a 詩驚瓊玖輝＝詩は驚く 瓊玖の輝（『紹述』22）
- b 才高青瑣鳳麟器＝才は高し 青瑣 鳳麟の器（『紹述』24）

- c 日落江城玉露秋＝日は落つ 江城玉露の秋（『白石』1）
- d 雲薄窓中樹＝雲は薄し 窓中の樹（『南海』3）
- e 波浮江漢葡萄緑＝波は浮かぶ 江漢葡萄の緑（『南海』3）
- f 遊倦中原色＝遊は倦む 中原の色（『南郭』3）
- g 山来四面雨収初＝山は来る 四面雨収まる初（『南郭』4）

### 3.2. 詩句のくぎりと2述語句における「ハ」の機能

ここまで見てきた句全体へのコントロールという機能は、比較的構造の単純な1述語の句を典型的な例とした。しかし、このことはまた2述語句などのやや複雑な構造を持つ句のくぎりの問題とも関わる。

漢詩は、7言詩の場合は「2字－2字－3字」のリズムを、5言詩の場合は「2字－3字」のリズムを基本的なくぎりとする。そしてこのくぎりは、句としての統語と関わる。たとえば、「勁竹扶持新細莖」が、「勁竹 扶持す 新細莖」と2－2－3にくぎって訓むことで、格助詞を与えなくても「主格名詞句－述語－目的格名詞句」であることを示すようにである。

しかし、こうしたくぎりが明確でない場合もある。そうしたときに、くぎりのリズムで確保されない句全体の統語的なまとまりを、「ハ」の談話単位形成コントロールが代替すると考えることが可能である。たとえば、以下の例である。

- (21) a 兼味幸非縁市近＝兼味は 幸に市の近きに縁るに非ず（『古学』1）
- b 戲蝶免被蛛網黏＝戲蝶は 蛛網に黏せらるるを免る（『古学』1）

この(21) aでは、4字めが「非」という「縁市近」を否定する助辞であり、bではやはり4字めに「被」という受動の助辞がある。通常の絶句では4字めと5字めの間にくぎれがあるが、これらの詩句では、そこで切ることができない。4字めの助辞がその直後の5字めの述語動詞と、訓読した際に直接関わるからである。

無マーカーの句頭名詞は、その直後の述語に対して主格として関わることを示すので、もし上の(23)の例の句頭名詞句に「ハ」を置かなければ、「幸非」や「免被」が「兼味」や「戲蝶」という主格名詞句に対する述語として読まれなければならないことになる。それは、「非」や「被」が直後の5字

めの述語動詞と切り離されることになり、意味上不適當である。

よって、「兼味」「戲蝶」の後に「ハ」を置いて、この詩句が末尾まで1命題であることを示す必要がある。それによって、2-5または2-1-4という変則的なくぎれが、適当なものとして認可されることになる。

實際上、仁斎詩集巻1にある80の「ハ」用例から、4例の接続形「テハ」、2例の名詞述語文の主語に与えられた「ハ」、6例の主格位置に置かれた準体句に与えられた「ハ」を除いた残りの68の「ハ」用例のうち、33例は、「くぎり」問題を解決して1句全体へのコントロールを保つための「主題」提示となっている。

この変則的なくぎりをもたらずものは、(21)で見たような後3字が述語と名詞句からなっているもの（伊藤仁斎の詩集巻1では6例）のほかに、結果構造を持つもの（同14例）、介詞構造を持つもの（同6例）、連体修飾節があるもの（同5例）、その他のもの（同2例）である。述語が2つ以上ある場合には、構成が変則的になりやすい。これらの33例のうち、「2-2-3」に分けられないものは、31例に上る。

まず、結果補語の例である。

- (22) a 妻裁春服成=妻は春服を裁して成る（『古学』1）  
 b 寒浪遥揺楚山動=寒浪は遥に楚山を揺して動き（『古学』1）

(22)のaで「妻」に「ハ」を与えないと、「妻裁して、春服成る」という2事態の並列の意味になる。結果的には似た意味であるが、妻の仕事が終わった、という結果補語の意味は出ない。bも同じで、「寒浪」に「ハ」を与えなければ、「寒浪遥に揺し、楚山動く」となり、やはり並列になる。

これは、句頭名詞句が1字名詞であるために、「(2-1) 2-3」というくぎりが不安定になるからである。同じ結果補語を持つ句でも、句頭名詞句が2字であれば、そうならない。以下の(23)である。

- (23) 小旛剪綵畢=小旛 綵を剪りて畢はる（『古学』1）

結果補語を持つ詩句で、句頭名詞句がある場合に、「ハ」が与えられないのは、すべて、「(2-1) 2-3」くぎりになっているものである。

介詞構造も同じ問題を持つ。以下の(24)の「天」に「ハ」が付与され、(25)の「龍」に付与されないのは、前者が4-1のくぎりを要求しているのに



対し、後者が 4-3 という自然なくぎりを要求するからである。「天」に「ハ」を与えずに、無マーカ-のまま「向」にだけ位置主格として関わらせた場合、「天が向かう、そして海門が開く」という読みが（意味的な適合性は別にして）2-3 という自然なくぎりから成立しかねないからである。

(24) 天向海門開=天は 海門に向いて開く（『古学』1）

(25) 龍向地中猶自蝥し=龍 地中に向いて 猶ほ自ら蝥し（『古学』1）

連体節を持つ句も同じである。以下の(26)は「ハ」が与えられた句、(27)は与えられていない句であるが、くぎりが異なる。

(26) 携廚人傍池辺樹=廚を携る人は 池辺の樹に傍ひ（『古学』1）

(27) 手栽花草漸生成=手から栽うる花草 漸く生成す（『古学』1）

こうしたやや複雑な構造の句は、くぎりも変則的になる可能性がある。漢詩の訓読においては、くぎりが統語的な支配の機能に関わっている。変則的なくぎりはそれを示すことができなくなる。よって、代理的に主題によるコントロールが行われるのである。これは、他の詩人でも同じである。

(28) a 漢地宮懸僊掌起=漢地の宮は 僊掌を懸けて起り（『南郭』4）

b 雲従音羽山頭起=雲は 音羽山頭より起ち（『紹述』24）

c 龍虎気蒸滄海湧=龍虎の気は 滄海を蒸して湧き（『白石』2）

d 彩射毫光直=彩は 毫光を射て直し（『南海』2）

### 3.3. 例外の議論

以上の統語的な機能は、「ハ」付与をある程度決定するが、完全ではない。「ハ」付与は、格統合のような完全な統語論的手続きではないので、語用論的に左右されるからである。

その最大の要素は、音律上の問題である。句頭名詞句が1字名詞である場合、訓読和語は2音節程度が多いので、2字の音読漢語と比べると、1～2モーラ分少ない。この不足感を「ハ」が埋めると考えることができる。實際上、句頭名詞句に「ハ」が与えられる場合、8割程度が1字名詞句であり、2字名詞句は2割をやや越える程度である。

前節まで論じてきた統語論的な機能は、この1字名詞という条件と重なることで、発動されやすくなる。このことから逆に、前節までの議論の例外となるのが、こうした音律の要素によると考えることができる。以下は、2字名詞なので、「ハ」が付与されなかったと考えられる例である。

- (29) a 風光易老雒陽春=風光老い易し 雒陽の春 (『古学』1)  
 b 清芬自溢三三径=清芬 自ら溢る 三三径 (『古学』1)

また、前節までに見てきた格関係の不安定とくぎりの不安定という2つの理由がないのに「ハ」を付与されている句も、音律上の問題が関わると考える。次の例は、述語に後置される名詞句が比較的単純な目的格名詞句で、「ヲ」付与が可能であるものにもかかわらず、句頭名詞句に「ハ」が与えられている例外である。これも1字名詞句が音律的に不足の感じを抱かせかねないことを避けるためであると考えておく。

- (30) 雲遮広寒殿=雲は遮る 広寒殿 (『古学』1)

さらに、音律的な問題以外に、格関係を持たない名詞句を主題の「ハ」が支配しているとすると、句頭名詞句がない句が問題になる。この例外に関しては、「ゆるい」連体節的な理解がオーバーラップして支配を加えていると考えておく。たとえば、次の例である。

- (31) 空搔短髮武江雲=空しく短髪を搔く 武江雲 (『古学』1)

この例では、述語後置名詞句が格としては不安定であるが、句頭に名詞句が無いので、「ハ」が加えられない。ただし、この句は全体として「空しく短髪を搔く、そういう江戸あたりの雲(の風景)である」という連体修飾句的な理解が可能である。少なくとも訓読したときの統語的な印象は、「細細たる窓前の雨」と同じような連体修飾句と近いと感じられる。よって、統語的に不安定でも1句としてのまとまりを確保できるものであると考える。

## 4. まとめ

「ハ」は、句に統合性を与えるために用いられている。

句の統合的な構造は、日本語の場合、動詞と名詞句の格によって選択的な関係として作られる。しかし、漢詩を訓読する場合、適当な格を与えられない場合がある。また、漢詩においては、くぎりというリズムがゆるやかな統合性をもたらしているが、訓読した場合、文法の再分析によって不可能な場合がある。

この2つの場合に、句としての統合性を持たせるのが、句頭名詞句に与える「ハ」の機能である。

\*この論文は、神奈川県共同研究奨励助成金による研究成果の一部である。

## 注

- 1) いわゆる古漢語, Archaic Chinese, 古文であるが、時代的に古代に用いられたものではなく、文体としてのそれを指す意味で「古典中国語」という用語を用いる。
- 2) 引用例句は、古典中国語としての5言7言の形をまず示し、その後に「=」でつないで訓読された形を示す。最後の( )内の「」は出典となる作品集名、その後の数字は巻数である。出典は以下の略号で示す。  
 「古学」～伊藤仁斎の『古学先生詩集』 「紹述」～伊藤東涯の『紹述先生文集』  
 「南海」～祇園南海の『南海先生文集』 「白石」～新井白石の『白石先生餘稿』  
 「南郭」～服部南郭の『南郭先生文集初編』
- 3) 形式上の格として、「前位置」を「主格」、「後位置」を「対格」と呼ぶことも可能である。
- 4) 斜格には「ト・ヨリ」のほか、名詞に後接する「ごとし」に接続する「ガ・ノ」を加えた。
- 5) このほかに、後述する「1字名詞であることによるくぎりの不安定化」と「音律の調整」といった条件も関与する。
- 6) 句頭名詞句に「ハ」以外の助詞が与えられた詩句（「ヲ」が1例、「ニ」が6例）は、すべて述語に後置される名詞句を持たない。

## 参考文献

- Li, C. & Thompson S..1981. 『Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar』. University of California Press
- Li, C.N. & S.A.Thompson.1976. 「Subject and Topic」 in Li (1976)
- Li, C.N. 編.1976. 『Subject and Topic』. Academic Press
- Tsao Feng Fu (曹逢甫). 1979. 『A functional study of topic in Chinese: the first step toward discourse analysis』. 学生書局 (台北)
- Tsao Feng Fu (曹逢甫). 1987. 『A Topic-Comment Approach to the BA construction』. 『Journal of Chinese Linguistics』 vol15
- Tao Feng Fu (曹逢甫). 1990. 『Sentence and Clause Structure in Chinese』 学生書局 (台北)
- 楊伯峻 何樂士. 1992. 『古漢語語法及其發展』. 語文出版社
- 徐烈炯 劉丹. 1998. 『話題的結構与功能』. 上海教育出版社
- 築島裕. 1963. 『平安時代の漢文訓読につきての研究』. 東京大学出版会
- 大坪併治. 1981. 『平安時代における訓点語の文法』. 風間書房
- 浅山佳郎 巖明. 2000. 『日本漢詩人選集 4 伊藤仁斎』. 研文出版